
テガミ魂

優女

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テガミ魂

【Nコード】

N3865Q

【作者名】

優女

【あらすじ】

ハチノス館長、ロイドから依頼を受けた万事屋。その内容はあるテガミバチの配達を手伝ってほしいとのこと。それを受け、万事屋一行は地球からアンバーグラウンドという夜が明けない星へやって来て、あるテガミバチ…ラグと共に手紙を配達するが…

* 0 0 1 * ハチノス

ここはアンバーグラウンドという名の日があけることのない地。

そこに” B E E ”、通称” テガミバチ ”という国家郵便配達員がいた。

彼らの仕事は” 届けること ”。

” B E E ”の拠点地、郵便館ことハチノスにて――

「アリアくん、凍結手紙課の調子はどうだい」

「はい、ロイド館長。ラグ・シーイングの心が見える心弾のお陰で、順調です」

館長室で館長のラルゴ・ロイドと副館長のアリア・リンクが書類を見ていた。

”凍結手紙課”（ゴールドレター）は、宛先や送り主の分からない配達不可能な手紙である。

「しかし館長。まだ凍結手紙は1000件もあります。いくら上の命令だと言え、ラグ・シーイング1人で配達するのは本人にとっても、かなり疲労していると思います。まだ子供ですし……」

「ああ、そのことなんだけど、僕も君に伝えようと思ってね」

「え？」

「いい案を思いついたんだ」

ロイドはにっこり笑ったが、アリアはこの状況が読めなかった。

*** 0 0 2 *** 手紙（前書き）

テガミバチ…本当に心温まる話です。銀魂も違う意味で温まりますが…。

では本編へどうぞ

* 0 0 2 * 手紙

地球

日本江戸かぶき町――

そこに何でも屋を営む
”万事屋”があつた。

「ぐおおーっ、があ……」

ジャンプを顔に伏せ、ソファで寝ている”万事屋銀ちゃん”のオ
ーナー坂田銀時がいた。

「ちよつと銀さん！起きてください！そーやってぐーたらしてるか
ら仕事がないんですよ！！」

そう言うのは万事屋の雑用兼ツツコミの志村新八だ。

「うつさいネ！ダメガネ！お前は1人で漫才でもやってろ」

万事屋で住み込みでバイトしている神楽が銀時と同じく、ソファ
で寝転がり毒舌をはく。

「神楽ちゃんも！寝てないの！」

「新八よオ。今寝とかねーと、いざ出陣の時に疲れてたら意味ねー
だろ？だから、いつ寝ればいいんだ？今寝ればいいんだよ」

「夜寝ろオオオオ！！」

新八のシャウトが万事屋に響く。出陣とか、違うこともツッコミた
かったが、気だるそうな銀時と神楽を見ると言う気が失せたのだ。

ピンポン

「以来ネ！！」

神楽がぴょんと跳ねて玄関へ向かった。

「どーせ新聞の集金かなんかだろ？」

銀時も玄関へ向かった。結局新八も向かう。

だが玄関にはすでに神楽しかいなかった。

「アレ？何だったの」

「ピンポンダッシュかコノヤロー！」

「いや、違うネ。手紙アル」

神楽は一通の手紙を見せた。

「手紙イゝ？」

銀時は手紙を手に取り、宛先を見た。

「アンバーグラウンド、ユウサリ、夜想道8番地、ハチノス……？」

新八は宛先を声に出した。

「ハチノスって……まさかこの間スズメバチの駆除した時の……」

O eとか、ナームとか、ロイヤルゼリー星とか。

「仕返しだアアア……！」

銀時が叫ぶ。

「はちみつが飲めるネ……！」

神楽の口からダラリとよだれが垂れる。

「お、落ち着いて下さい銀さん！違いますよ……！落ち着いて下さい……！」

冷や汗を流す新八がこの場を落ち着かせようとする。まだ手紙の内容も読んでないのに、悪い方に決めつけるのはまだ早い。新八はそう考えた。いや、そう考えるのが妥当であろう。

封筒に入っていた手紙を出し、新八は読み上げた。

「……こんにちは。初めまして地球の万事屋さん。僕は郵便館、通称ハチノスの館長、ラルゴ・ロイドと申します。あなた方に依頼をす

れば、何でもやってくれると聞いてこの手紙を出しました。一緒に宇宙船のチケットを同封したので、是非アンバーグラウンドのユウサリ郵便館へお越し下さい”…ですって」

「新手のスズメバチか…」

「だからスズメバチじゃありませんて！」

郵便館と書いてあった。恐らく本物の蜂とは関係ないようだ。

「とにかく、依頼が来たからには宇宙だろうが、勿論行きますよね？」

「「チェンジで」「」

銀時と神楽がハモった。

「いい加減にしろヨークシャーテリアー!!」

というわけで、万事屋一行はアンバーグラウンドという星へ向かったのだった。

*** 0 0 3 * 太陽のない星（前書き）**

長いですが、どうぞ！

* 003 * 太陽のない星

ハチノス――

「失礼します」

館長室にラグ・シーイングが入ってきた。その横には相棒のニツチディンゴとステーキもいる。

「やあ少年！今日は君に特別な助っ人が来てくれてね」

「助っ人…ですか」

「ラグのディンゴはニツチだけだぞ！」

いつものように頑なにニツチは言う。

「はっはっは。大丈夫だよ、摩訶少女！凍結手紙課は大変だからね」
でも！と、ラグはロイドの口を挟む。

「他のテガミバチは違う配達で忙しくて…ガラードさんもぼくに頼んだので…」

言い詰まるラグにラルゴは微笑んだ。

「ラグ・シーイング。君は本当にいつもよくやってくれる。僕自身も早く凍結手紙課を終わらせてちゃんとした配達に行かせたいから

ね」

「気持ちは嬉しいんですけど…やっぱり助っ人の人も他の配達が…」

「誰が助っ人がテガミバチって言った？」

「え…」

ラグの目が点になった。相変わらずラルゴはにっこり笑っている。

「おい、入ってきたまえ！」

その時、アリアはハアッと溜め息を付いた。

どういうこと？と、ラグはあたふたしていた。

ガチャ

鈍いドアノブの音がした。

「どゝもオ。万事屋でエす」

…！？誰！？

ニツチはラグの後ろに隠れた。

銀時、新八、神楽はずかずかと入って来た。

「か、館長、この人たちは一体…」

「助っ人だよ、少年！」

円満の笑みで言う。

「自己紹介お願いできますかな」

ふん、と銀時は鼻を鳴らしてラグたちに近づいた。頭をポリポリとかいている。

「万事屋銀ちゃんオーナーの坂田銀時でエス。好きなものは甘いものでエス」

ふざけるなよ、と新八は心の中でつつこむ。

「同じくアルバイトの神楽ネ。得意なものはオセロアル。角4つ全部とれるぞコノヤロー！」

全く関係ないよねと、またつつこむ新八。

「同じくアルバイトの志村新八です」

ラグは少し恥ずかしがって

「Beeのラグ・シーイングです！よろしく願いします！この子はデインゴのニツチで…」

「焼いたらおいしいニツチのステーキだ！」

毎度お馴染みの言い分である。ステーキという不思議な生き物に、神楽は興味津々だった。

…ここでラグと出会う前の過程を辿ってみよう。

――＊――＊――＊――＊――

遡ること数時間前――

宇宙船にて

「やっぱり宇宙はいいよなあ……」

「銀ちゃん、あの星真っ黒アル。なんかしおれた黒豆みたいネ」

銀時と神楽は宇宙船の窓から風景を楽しんでいた。

やがて宇宙船は着陸体制に移った。神楽の言っていた、黒豆みたいな星がアンバーグラウンドであった。

「どんな天人が暮らしているんだろう……」

新八もつぶやくよう言った。

宇宙船から降り、3人はハチノスへ向かった。

町ゆく人々が珍客だと、ジロジロ見てくる。

「地球人にそっくりの天人だな」

「よかったですね」

でもやっぱり人々の視線が痛い。確かに、着物とチャイナ服をまとっているの、向こうからしたら珍しいだろう。この場でこの3人が異質のようだった。

「それにしても真つ暗アルな。新八、今何時ネ」

新八は腕時計を見た。

時刻は午後1時をさしていた。勿論、地球との時差があるから調節してある。

「…アレ、午後1時イイイイ!？」

「新八よオ。嘘をつくならもつとマシな嘘つけコノヤロー。誰もこんな真つ暗な時に太陽サンサンな真昼の1時だって言われても信じないよ、新八くん」

あきれた様子で銀時は言った。

「いや、でも…」

新八はもう一度時刻を確認する。しかしどう見たって午後1時である。

しょうがなく、新八は町の人に訪ねた。

「あの、今何時ですか？」

「あんたたち…見かけない人だねえ」

そう言ったのは、以前”ハニーウォーターズ”という町で反政府活動を行っていたサラだった。

「今は…昼の1時だよ」

サラはにこつと笑った。

「あっありがとうございます！」

「いいよ。困った時はお互い様」

そして新八はサラに別れを告げた。

「銀さん…、やっぱり今昼の1時でした！」

「どうやら、そーみてーだな」

銀時も何か確信を得ていた。

万事屋一行は、ハチノスに向かった。

ハチノス

「館長、依頼した者がお見えになっています」

アリアは館長室をノックした。

「うん、通してくれ」

「どうぞ」

3人は館長室に入った。銀時は小声で新八に言った。

「あのネーチャン、美人すぎだろ」

「ちょっと、何言ってるんですか!？」

ロイドは椅子から降り、3人の前に立った。

「やあ、初めまして！ハチノス館長のラルゴ・ロイドです！遠い所からはるばるありがたく思うよ！」

そして今回の依頼の内容について話した。簡単に言えば、配達を手伝って欲しいとのこと。

「君たちも気づいてるかもしれないけど、この星には太陽がないんだ。あるのは人工太陽と言ってアカツキという首都にある政府が作った太陽しかないんだよ」

なるほどな、と銀時は納得した。

「日傘がなくてちょうどいいアル」

「そしてただ配達をするんじゃないくて、郵便配達員……”Bee”の手伝いをしてもらいたくてね」

——*——*——*——*

というクダリがあった。

***004*ゲボマズスープ（前書き）**

シルベットお手製ゲボマズスープ登場！！

*004*ゲボマズスープ

「要するに、配達すればいいんだろ？」

鼻をほじくりながら銀時は出口へ向かった。

「ちょっと、銀さん！単独行動は困ります！！」

新八の言葉で銀時は振り向いた。

「だアかアら、新聞配達すればいいんだろ？手紙なんざアナログ方式古いんだよ。読売か？毎日か？日スポかコノヤロー」

「集金アルかコノヤロー！」

続いて神楽も言う。

ロイドは溜め息をついた。

「だから手紙だってば。じゃ、少年！頼んだよ」

いきなりラグに振った。

「ええっ！」

この人たちを？と、ラグは驚くばかりであった。

ハチノス前――

「手紙の宛先はビアンゴという町で…」

「お前、神楽つて言ったな。女のクセに乳が豊富ではないな」

「なんだと！チビに言われたくないアル！！それに呼び捨てじゃなく、かぶき町の女王様と呼ぶヨロシ」

「チビなどではない！！ニツチだ！」

「ガキがナメたこと抜かすんじゃないネ！」

神楽とニツチはラグ達から少し離れた噴水の前で取っ組み合いをしていた。アレ、銀さんは？と新八は辺りを見回した。

「なんでジャンプねーんだよ！今時置いてねーとか腐ってるわ！」

「だからジャンプって何だよ、兄ちゃん」

銀時は店のおじさんと何やらもめている。もはや收拾がつかない。

「…すみませーん！話を聞いてください！！！」

ラグの一声でようやく5人＋一匹、集まった。

「チビ助、早く話すネ」

「オメーが喋んねーからこうなったんだ」

「いや、あんたらが悪いからね！！！」

新八は速攻つつこむ。

ははは、とラグは呆れた様子で笑う。

「えっと、手紙の宛先はビアンゴの町。ユウサリの北東部だから歩いていけば数時間で着くかな。鎧虫のテリトリーはこの溪谷が心配だな」

地図を広げた。

「ガイチュウ？そんなのこれでイチコロだろ」

銀時はスプレーを出す。

「おお！銀ちゃんいつも携帯してるアルか！流石ね！！」

「どこほめてんだよ」

「あの男のアレは、ラグの心弾の強さより強いのか？」

ラグは溜め息混じりで言った。

「鎧虫はそんなんでは効きません！この、僕が持つてる心弾銃で鎧虫の隙間を狙って倒すんです。鎧虫は人の心に反応して襲ってくるから、危険を承知してください」

「せんせー、神楽さんが授業についていけてません」

神楽は地面に突っ伏していた。

「その鎧虫がどんなんか知らねーが、ガンガン行こうぜ」

銀時は1人勝手に行ってしまった。ラグはまた溜め息をつく。

今回の配達…心配だなあ…。

「チビ助、お腹空いたアル！」

神楽の足が止まった。

そういえば朝から何も食べていない。

「食料…あつ」

ラグは鞆を探り、何か取り出した。例のゲボマズスープである。もちろんシルベットお手製の。

これを渡すべきかと躊躇しているうちに、スープが入った筒を神楽が取り上げていた。

「…！スープアル！！食べていいアルか？」

えっ、とラグは焦ったが見つかったのはしょうがない。

ラグは叱咤激励の覚悟で全員分のスープをよそった。

「わあ！美味しそうじゃないですか！」

新八は見た目に感心した。ニッチはクンクンと臭いを嗅ぐが、すぐにゲボマズスープだと気がついた。怒りの目でラグを見つめる。

「いただきます…！」

全員スープを口に運んだ。一瞬、沈黙になる。

「ん！！」

銀時と新八は青ざめた。

「し、新八君。なんだ…この喉が焼ける感じは…」

「銀さん…、僕、もうダメです！！」

「俺もだ…」

「「オゝエゝエゝエゝ！！」」

2人は中座になり、ゲボマズスープを吐いた。
口を拭いた銀時はラグに向かって

「テメー！なんでこんなクソマズいモン食べなんだアアア！！お前
味覚おかしいんじゃないか！！」

「ちょっと銀さん！悪気はなかったんですから」

ラグは半泣き状態。

「すみません…。ゲボマズスープしかなかったんで…あつ」

ラグは口を抑えた。
そして吐いてしまう。

その背中を銀時はさすった。

「お前もマズいとおもってんじゃねーか。…誰かが作ってくれたんだろ？」

ラグの頭にシルベットが浮かんだ。

「はい…」

「お前って変な奴」

銀時は少し笑って見せた。ラグは温かい気持ちになった。笑った表情が、憧れのテガミバチ、ゴージュ・スエードに似た”優しさ”を感じたからだ。

「これ、上手いアルな!!」

「お前が味覚おかしいんじゃないかアアア!!」

神楽はゲボマズスープを何杯もお代わりしていたのだ。

*** 005 * 思い出（前書き）**

テガミバチ線路に銀魂列車が走っているようです…。

* 0 0 5 * 思い出

「配達は順調です」

ラグは地図を確認した。ちょうど渓谷にさしかかったところだ。

「どこが順調だよ。こんな危険きわまりねエ場所に連れて来やがって。崖から落ちたらどうすんだコノヤロー」

ラグは笑った。もう銀時の短気でチャランポランな性格は慣れたのだ。

んっ…

銀時と神楽は何かを感じた。殺氣的で、強大で、大きな何かを。ラグも心弾銃を構え、ニツチも髪を剣に変形した。

ドゴオオオオオ

渓谷の底から飛び跳ねてきたのは鎧虫、シードルだ。

「うげエエエエー！！？なんだアレエエエエー！！」

銀時と新八は驚いた。

「下がっててください！危険です！！ニツチ、後ろに回って！！」

ニツチはラグの言ったとおり、シードルの後ろに回り、鋭い剣で口

部から伸びる触手を切った。

「ほあたアアアア!!」

ドッカアアン

神楽の怪力かかと落としてシールドはひっくり返った。

続けてまだ伸びる触手をニツチが切っていくがきりがない。

「おチビちゃん、下がってな!!」

銀時は地面を蹴り、宙を舞い、木刀を構えた。

「うらアアアア!!」

思いっきり木刀を振り下ろしたが…

「あり?」

鎧虫の堅い鎧で木刀が無惨にも折れてしまったのだ。

「何やってんすかアンタ!!」

ニツチと共に触手を木刀で斬っていた新八がつっこむ。

その隙にラグはシールドの弱点、隙間がある腹部に走った。

「心弾装填…響け!赤針!!」

ガッシャアアアン

ラグの心弾は見事隙間に命中した。シールドは内側から破裂し、鎧が飛び散った。

「ん…、なんだコレ」

銀時は金平糖のようなかけらを指した。

「それはぼくの心のかけらです」

ふーん、と銀時はそのかけらを眺めた。いろいろ疑問があつたが、不思議とどうでもよくなつた。それ程、綺麗であつたからだ。

ラグの心弾銃にかけらが当たつたのか、映像が出てきた。

ゴーシュとの旅の記憶である。ゴーシュに憧れ、テガミバチを目指そうと決意した時、母親がアカツキに連れて行かれた時のこと、そして配達であつたたくさんの出会いや別れ…。ゴーシュが反政府組織、リバースの一員であり、こころの全てを無くしてしまったこと。

「ゴーシュ…」

ラグの目から溢れんばかりの涙が伝つた。それを銀時たちは横から見ていた。失うことの辛さ、それには銀時も酷く共感していた。銀時は何も言わず、ただラグの頭を撫でるだけでいた。

「ラグはどこか痛いのか？」

ニツチは心配そうにラグを覗き込む。

「大丈夫だ」

優しく銀時は言った。

その夜は騒がしかった。

洞窟―

「お前が数時間で着くっていったんだろーが！」

「そつネ！お陰で野宿アル！」

偶発的にシールドが現れたため、ルートを遠回りにしたのだ。

「無理して危険な道に行くよりも、遠回りして安全に行った方がいいんです」

「ラグ君の言うとおりだよ。ここは配達のベテランに任せましょう」

新八はラグの意見に賛同である。

「けっ、お前もいい子ちゃん気取りかよ」

銀時は寝転がった。ニッチは既に眠っていた。はなちようちんが引っ込んだり膨らんだりしている。

「ったくよ、こんなデンジャラスな配達をガキ2人でやるなんざ怖えな」

銀時は呟いた。

ラグはニツチを眺めた。

「…手紙を待っている人がたくさんいるんです。ぼくらテガミバチは人々のところを託されています。例え危険でも、とても誇りある仕事なんです…」

銀時は微笑んだ。

「オメーはよ、そのゴーシュって奴に憧れてテガミバチになったんだろ？今はそいつに届かねーかもしれないねーが…いつか、お前の”手紙”がきつと届くさ」

銀時の言葉にラグは泣き始めてしまった。

「本当お前は泣き虫アルな」

遠く空で星が瞬いていた。

*** 0 0 6 * 仲間（前書き）**

テガミバチって

本当にいいお話です！

銀：銀魂は？

……

銀：ノーコメントかよー！！

* 0 0 6 * 仲間

朝になり、ラグは目が覚めた。まだ他の4人は寝ている。そろそろ起こさないと配達に間に合わないと思った。

ラグは銀時の体を揺さぶった。

「あー！起きてくださーい！」

それでも銀時はいびきをかいて寝ている。

もう一度揺さぶる。すると、銀時は寝返りを打って少し目を開けた。

「うるせーな。まだ真っ暗じゃねえかよ……。俺ア眠いんだよ」

そう言うのと、再び寝る。ラグは溜め息をついて、息を吸い込んだ。

「あー！起きてくださーい！！」

ラグの声は洞窟内に響き渡る。

「うつさいアルな。今何時だと思ってるネ」

神楽は目をこすった。新八も起きた。

「すみません、今何時ですか？」

新八はラグに訪ねた。

「えっと…7時です」

「おいおい、冗談じゃねーよ。後2時間は寝られる」

銀時はまた寝転がる。

本当にしょうもない奴だよ…。

「配達に間に合わない大変です！」

「わーったよ！！起きる！起きればいいんだろ！？」

と言って、銀時はだるそうに起きた。

それぞれの身支度が終わり、出発の準備をした。

「ビアンゴの町までもうすぐですが、これから道が険しくなるんで気をつけてください」

新八は頷いたが銀時と神楽は聞いてないかのように歩き出す。ニッチもぴょんと跳ねる。

しばらく歩くと、ラグが言ってた通りの険しい道が現れた。道と言うより岩だらけの荒地のようだった。

だが銀時と神楽は全く気にせず普通に岩山を乗り越えていく。ニッチも跳ねているだけなのでものともしない。ただ一人、ラグだけがみんなの遅れをとっていた。

それを見ていた銀時は溜め息をつき、ラグの元へ戻った。岩山の上から手をさしのべる。

「ホラ、大丈夫か」

ラグはその時、昔手紙としてゴーシュと旅をした時を思い出した。あの時も、自分が険しい岩を登ろうとした時ゴーシュが手を差し伸べてくれた。あの時は無視してしまったが、今は銀時の手を借りた。

「ありがとう…」

顔を赤らめて言う。

「チビには厳しいだろ？無理すんな」

銀時は笑みを浮かべた。

ピアノゴの町まで
もう少しである。

* 006 * 仲間（後書き）

銀：銀魂の主人公の俺の気持ちを考えろって！

だいたいこの話、ほとんど俺が悪役みてーな立場じゃねーか！！

ラ：ははは…？

銀：てんメエエエ！！そのいい子ちゃんの裏に何恐ろしい獣飼って
んのか知らねーが、うし！次回からテガミバチの主人公は俺だ！

ラ：ちょ、ぼくです！

銀：うるせっ！お前は”ラグ魂”でもやってろイ！！

ラ：（半泣き）

結局銀さんって悪役合ってるよね…？

* 007* 旅へ（前書き）

最終回っぽいタイトルですが、違います><

銀：ね、だから銀魂は？

……

* 0 0 7 * 旅へ

「遠いところからわざわざありがとう。かわいいテガミバチさん」

ラグはサインを貰った。

無事にビアンゴの町の宛先に着いたのだ。

宛先のおばさんに礼を言われ、嬉しそうだった。無事に手紙を届けられたことが、何よりも大切である。

”仕事のやりがい”

万事屋は依頼があれば金で動くのが仕事。依頼がなければ家計は火の車だ。悪役に回ろうが、金を貰うためならやった。だから、万事屋の3人は仕事のやりがいを感じる機会は少なかった。あんなに辛い配達をラグは毎日こなして、それをやりがいに行っているー。

万事屋は改めて感じた。

—*—*—*—*

ハチノス

「やあ！配達お疲れ様！無事に帰館できて安心したよ」

ロイドはにこやかに言うが、ガツと銀時に胸ぐらを掴まれた。

「無事に帰館だア？ふざけんじゃねーよ！命幾つあっても足りねー」

よー！こんな危険な配達、子供にやらせんのはいかんよ、やっぱり」

「ちよつと！銀さん！」

新八は銀時を止める。

ロイドを離した。

「オイ、モジャモジャメガネ」

神楽の言葉に、一瞬沈黙した。

「…もしかして、僕？」

ロイドは自分に指差した。

「そつネ。まだあるアルか」

「え…、何を？」

「配達ネ」

神楽は真剣な眼差しで言った。

「チビ助の心意気に感動したアル。私も万事屋廃業してテガミバチに転職するアル！」

「きゃーぐらちゅわはーん！？何言ってるのオ！？俺たち3人で万事屋だろ！？」

銀時は焦りに焦りまくっている。

「白血球がいなくなったところでなんともしられないネ。銀ちゃん右脳、新八メガネでなんとかなるネ」

「なんともならねーよ！僕は神楽ちゃんがいなくなってもメガネなのか！？メガネだけなのか！？」

「うつせえな！お前はご飯にメガネかけて食つとけ！！」

またこの3人のグダグダが始まった。

「まあまあ、落ち着いて」

ロイドは呆れ顔。

「まア、テガミバチになるのは無理だが…。また配達を手伝ってくれるなら…ねえ、アリアくん」

「私に振らないでください、館長」

銀時は頭をポリポリ掻いてラグに近づいた。

…はい、ラグはこの場にいたんです。

「お前がいいって言うなら…次の配達も手伝っけどよ」

「いいんですか！？」

ラグは喜んだ。

「次の配達は…足手まといにはならねーようにすつから」

銀時は鼻の頭を掻いた。

「こーしちゃいけないネ！早く配達に行くアル！チビ助！」

神楽は張り切っていた。

「言つとくが、ゲボマズスープは厳禁な」

「あ、はい…」

「シルベットのスープは狂おしくゲボい…」

ニツチはボソツと呟いた。

* 007 * 旅へ（後書き）

銀：あーっ！そーいや木刀が折れていた！

神：また通販で買えばいいアル

ラ：鎧虫の鎧から作った剣なら、ゴベニさんの所で売ってますよ？

銀：よし！それ買っ！柄の部分に”ブルー・ノーツ・ブルース”って入れてもらっ！

新：いや、確かに洞爺湖と同じ湖だけでも！！

*** 0 0 8 * 大事な人（前書き）**

暇なんです!!

* 008 * 大事な人

次の宛先は溪谷の町、シレンシオ。片道徒歩2日と短い距離だが、一步ルートを外すと鎧虫の出現ポイントも多くなる。

ルートの途中にはジョルジュの小さな村があるが、その少し先にあるダコワーズ断崖は危険。

「…ここは…エレナさんの故郷だったね」

宛先を見て、ラグは呟いた。

ユウサリとヨダカを結ぶビフレストを通った。

相変わらず神楽はニツチと取っ組み合いをしているが、他は皆黙っている。いい加減、この空気も嫌になってきた。

新八が切り出す。

「な、なんか盛り上がるゲームでもしませんか？マジカルバナナとか」

「マジカルバナナ…？」

「却下」

銀時は言う。そしてラグの方を向いた。

「…正直、なんで手紙なの？メールとかじゃダメなの？」

「メール？」

ラグは”メール”という言葉を初めて聞いた。無論、この星にはそのような通信機能はないのだ。

「遠く離れて住む人にとって、手紙は”ところ”や”希望”…そのものですから」

「ところや希望ねエ…」

銀時はラグの前を歩いた。

「あのっ！銀さんは書いたことありますか？大事な人への手紙…とか」

銀時は足を止めた。ラグの”大事な人”に喉が詰まった。大事な人…。いろんな人が脳裏に浮かんた。そして、最後にこの人…松陽先生がいた。

「…大事な人が…もう、この世界からいなくなっちゃったら、どこに出せばいいんだよ」

銀時は哀しげに呟いた。

ラグは思い出した。

ゴーシュに手紙として運ばれたあの晩、ゴーシュの問いに…

『ラグは…誰かに手紙を書いたことはありますか？』

『ないよ。いいよ、手紙なんて』

『じゃあ、お母さんは！？お母さんはどこに出したら届くんだよ！
！…お前も、テガミバチも、大っ嫌いだ！！』

同じ感覚が芽生えた。

「…その人に、伝えたいことはあるんですか？」

銀時はフツと笑った。

「いっぱいあるよ。おっと、内容聞くような野暮な真似はすんなよ」

ラゲもつられて笑う。

その光景を、怪しげな影が見ていた。

* 009 * 略奪者

万事屋 + α 一行は順調に配達ルートを辿っていた。
ラグは足を止めた。

「少し、休憩しますか？」

銀時たちはそこまで疲れていなかったが、ラグは結構息が上がっていた。小さな体なので、そろそろ疲れが来ていた。

「休むか」

「はい…！」

と言うと、ラグは自分のお腹に鞆をのせ、眠りについた。

銀時たちも腰を下ろした。

「…銀さんも、ラグ君を見習って仕事熱心になるといいんですけどね」

新八が嫌味のように言った。いつもなら反発する銀時だが、今日はしなかった。

「…そうだな」

「銀ちゃんの死んだ魚のような目も、きらめくアルか？」

酢昆布をかじりながら神楽は言った。その横で、ニッチは酢昆布の

独特な匂いに興味を示していた。

「俺も寝るか…」

5人＋一匹は束の間の眠りについた。

＊――＊――＊――＊――＊――

「アレは…BEEか？」

黒い影はこちらへとやって来る。全身黒ずくめの”男”は、略奪者…リバースの一員だった。

反政府組織”リバース”。首都アカツキの人工太陽を消すため、そして世界の”再生”を唱え活動している。

そして、BEEの手紙を強奪する役目もある。

”男”は、ラグの鞆の中身を探った。手に取りだしたのは何枚かの手紙。だがその光景を銀時は見逃さなかった。

新しく調達した鎧虫の鎧で造られた刀の鞘を素早く抜いた。

ザッ

”男”の後ろに回って刀の先を首筋ギリギリ手前のところに当てた。

「テメー、何してんだ」

”男”は刀を向けられていることを知っているが、所持している銃を取り出して銀時に向けた。

”男”の横には、白い格好をした”女”もいた。

「僕はマローダー、略奪者…」

「略奪者ア？」

銀時は首を傾げた。黒ずくめの”男”は、風でスカーフが捲れ顔が露わになった。

それは

ラグの記憶で見た、

ゴッシュ・スエード
だった。

「…お前、ラグの記憶で見た…確か、ゴージュって言った…」

”男”の紅色に光る瞳からは、殺気を感じる冷たい目をしている。
銀時も”男”の目を噛みつくように見つめる。

「僕は略奪者、ノワール」

「ノワール？ゴージュじゃねーのかよ」

その時、銀時は思い出した。ゴージュはこころの全てをなくし、リ
バースの一員になっていることを。

白い格好の”女”は、銀時の後ろに回り、短刀を翳した。

「やめろ、ロダ」

ノワールの言葉に、ロダは短刀をしまった。

「手紙、返せよ」

ノワールは握り締めていた手紙を再び強く握った。

「僕は手紙を剥奪するのが仕事です。ご了承ください」

「剥奪う？」

銀時は鼻で笑った。

「泥棒と一緒にじゃねーかよ、兄ちゃん」

ノワールの顔つきが更にこわばった。

「…邪魔をするのなら、あなたの命…略奪致します」

銃口が鋭く光った。

***010*侍（前書き）**

風邪引きました…（泣）

* 010 * 侍

「あなたの命…略奪致します」

ノワールの銃口が光る。銀時の頭に狙いを定める。

だがその刹那、銀時は次の行動に移っていた。

カシャーン

銃が地面に落ちた。鈍い、何か破片が飛ぶような。

ロダは再び短刀を取り出す。大きく振り上げ、銀時を狙う。

ガキイイイン

しのぎを削る音が鳴り響く。

ロダは大きく宙に舞い上がり、上から短刀を銀時に向ける。

それを即座に交わした。

ノワールは銃を広い、装填した。

「心弾装填…漆黑！」

ジムノペディにはめ込まれてある精霊琥珀が黒く光り、銃口から漆黒の鋭い針が、銀時に向く。

「オラああああ！」

刀で心弾を跳ね返した。だが、後ろからロダに狙われる。

間に合わないと思った瞬間だった。

「お前は…！」

ニツチが髪の手で、ロダの短刀を止めていた。

「助かったぜ、おチビちゃん」

銀時はニツチに礼を言う。

「おチビなどではない！ニツチだ…！」

桂の口癖とはニュアンスがあっただが、なんとなくそれに似たのを感じ、銀時は微笑した。

「じゃあニツチ、行くぜ…！」

バァアン

バァアン

ノワールは容赦なく銃を撃つ。

それをよける銀時。

「お前、ラグ・シーイングのデインゴではないのか…？」

ロダとニツチは宙に飛び上がりお互いの剣を向け合っている。

「ニツチはラグのデインゴだ！！コイツのデインゴなどではない！」

「では何故、かばう？」

「…ニツチは感じた。この天パは、手紙を護ろうとした！それはニツチも同じだ！！」

形を自由自在に変化できる髪を、何本かの剣に形を変え、ロダを一本槍に狙った。避けることが出来なくなり、ロダは刹那、固唾をのんだ。

「なかなか、命を略奪するのが難しいですね…」

「こちらら簡単に命とられるようなヤワな奴じゃないんでね。剣はお手の物さね」

お互いに息が上がっている。だが、ノワールは一向に手紙を離さない。

「あなたは…そのテガミバチのディンゴではなさそうですね。…一体、何なのですか？」

銀時はフツと笑った。
少しためらってから

「侍だよ。サムライ」

「侍？」

「そう、侍。強くて格好良くてみんなのヒーロー、ジャパニーズヒーロー？」

「何を言っている」

その瞬間、

シュッ

ノワールは手紙から手を離れた。宙を舞った手紙を銀時がキャッチした。

ノワールは手を抑えた。浅いが傷を負った。

「…何をした」

銀時は刀を鞘に収めた。

「護りたいモン護っただけよ。それが侍」

ノワールはくるっと後ろを向いて歩いて行った。

「ロダ、行くぞ」

ロダはまだニツチと戦闘中だった。

「ノワール、手紙は…」

「今日は引き上げる」

「……」

ロダはニツチから離れ、ノワールの横を歩いた。

「待って！ノワール！！」

ラグが後ろから叫んだ。

「銀さん！何があつたんですか！？」

新八と神楽がラグに続いて駆け寄った。

ラグは続けて言った。

「なんでそんなにリバーに肩入れするんだ！！…もう、こんなことやめよう！？」

ノワールは足を止めた。

「…君には関係ない」

そう言い捨てると、再び歩き出した。

「待って！待って！」

ラグはノワールを追おうとしたが、銀時はそれを止めた。

「ラグ、危険だ」

「放して！放して銀さん！！」

ラグの目から大粒の涙がこぼれ落ちる。

銀時は無言のまま、ラグを抑える。

持っていた手紙をラグに渡した。

「これ」

「手紙…。もしかして」

「配達、大事だろ？」

「はい…！」

ラグは涙を拭った。

それでも、涙は止まるのをやめなかった。

*** 0 1 1 *** 夢（前書き）

この話はラグが語り手をしています！

* 0 1 1 * 夢

——*—*—*

ここは…

お母さん？

そんなところで何してるの？

寒いでしょ？早くこっちへおいでよ。

「お母さんを返せエ！！」

「連れて…行かないで。返して、返して。ぼくの…お母さん…」

お母さんは、光の中に消えてしまった。

光に近づく程…影は濃くなる…。

闇も深い…。

人類精霊化計画の首都。

繁栄の首都。

たった一人のヘッド・ビーがいる首都。

人類精霊化計画で失敗したモノは、
”精霊になれなかった者”と言
われ、捨てられる。

それが首都アカツキ。

ぼくのお母さんがいるところ。

ぼくはお母さんに手紙を出したい。

今までのことを存分に語りたい。

テガミバチになったことも。

お母さん…

お母さんのこと考えるといつも温かい気持ちになるんだ…。

アレ、ここは…

シルベットの家？

あ…

ニッチもシルベットも…アリアさんもコナーもザジもいる…

一番奥にいるのは…

ゴージュだ。

そうだ。ゴージュはもうノワールじゃないんだ。
全てのところを取り戻したんだ。

「お兄ちゃん、もう配達行くの？」

「そうだよ、シルベット。今日はアカツキまで配達なんだ」

…そっか。ゴージュは憧れのヘッド・ビーになったんだ。

「ゴージュ！」

ぼくはゴージュを呼んだ。

「どうしました？ラグ」

「…気をつけてね、ゴージュ！」

「ありがとう、ラグ」

ゴージュは優しく笑った。

その夜、ぼくはゴージュと一緒に寝た。

「ねエ、ゴージュ。ヘッド・ビーは…大変？」

「…はい。とても大変です。でも、BEEとしての誇りは変わりませんよ」

そう言ったゴージュの目は、とても優しかった。

「どうやってらヘッド・ビーになれるかなア」

「ラグならきつと、なれますよ。…真面目で、少しバカ正直なところもあります」

「ひどいよー、ゴージュ」

はははっとお互い笑った。

「ラグは…手紙に込められている”ころ”や”希望”の大切さを、よく知っていますから」

「うん、書く人のころそのものだからね」

「そういえば…今朝配達でアヌさんに会いましたよ」

「お母さんに…？」

お母さんは首都アカツキで、聖母として教会にいる。

「ラグは元気かって聞かれたので、元気ですって言いました」

「そっか。…今度お母さんいつ帰れるんだろ…」

お母さん…

ゴーシュ…

会いたいよ…

*** 0 1 2 * 泣き虫デガミバチ（前書き）**

元に戻ります。

評価、ありがとうございます！

* 012 * 泣き虫デガミバチ

「ん…」

ラグは目を開けた。

…アレは、全部夢だったのか。

「いい夢すぎたよ…」

「俺もいい夢見た。パフエ食い放題」

「銀さん！」

まだみんな寝ている中、銀時は岩を背もたれにし、起きていた。

「おはようさん」

「おはようございますー！」

ラグはもじもじしていた。

「昨日は…手紙を守ってくれてありがとうございますー！」

銀時は照れ気味で頭を掻いた。

「オメーが無防備なだけだろーが」

ラグは銀時の横に座った。不思議と、落ち着くのだ。ゴーシュの横で寝たあの日のことを思い出した。あの時も落ち着いた。ラグは銀時に話し掛けた。

「…銀さんの住んでいるところは、太陽があるんですか？」

「あるさ。でつかいお天道様が」

ラグは興味深々。

「太陽の下にいと、どんな気分になるんですか！？気持ちいいですか！？」

銀時は苦笑いした。

「夏は暑いだけだ。見苦しい時もあらア。だけど冬は気持ちいいな。日の下でする昼寝は格別なんだ」

「へー」

ラグは羨ましそうな顔をした。

「…あの太陽は、どうにも気に入らねーや。あつちだけ光ってて、こっちには届かねエ。全く温かくねーよ。むしろ冷たい」

「……」

ラグは胸が詰まった。自分が目指しているのはあの人工太陽がある首都。その明るく照らされているあそこが、冷たいなんて…。でも…

『首都は人種格差がある』

『あそこに近づくにつれ…影も濃くなるのよ』

『アカツキで、お兄ちゃんはこのころをなくしてしまったの…』

『リバーズ！リバーズ！！首都の人工太陽の光を消せ！！』

「……………」

「どうした、ラグ」

「あつ、なんでもないです！」

銀時はラグの頭に手を載せた。そういえばラグも銀色の髪に、紅色の瞳を持っていた。アルビス種特有である。銀時もその容姿であるのに気づき、ラグに尋ねた。

「お前さ、まさか俺の子供…なわけあるかアアアア！！何言わせようとしてんだアアアア！！」

「銀さん？」

ラグの目が点になる。

「…これで…最後の配達かも…」

「え……？」

銀時は空を見て、呟いた。

「もっと…一緒に、配達したいです!」

「ラグ…」

「もっと、銀さんや新八さんや神楽ちゃんと…一緒に…っぐ」

ラグは泣いてしまった。

銀時はラグの頭を撫でた。

「泣くなよ、男だろ?いつまでもメソメソ泣いてっと、悲しい気持ち
ちが倍になるぞ」

と言う銀時も、悲しそうな顔をしていた。

銀時は溜め息を吐いた。

012 泣き虫デガミバチ（後書き）

神：銀ちゃん！ガチで万事屋廃業して届け屋に転職するアル！

銀：それは郵便局の仕事だろーが！なんでも。屋みたいにやれば
いいと思うなよ！！ただでさえ銀魂は。屋多いんだからさ！

神：例えば？

銀：殺し屋、運び屋、殴られ屋、万事屋、始末屋、パトリオット…
？え、パトリオットオオオオ？

神：……

*** 0 1 3 * 無言（前書き）**

銀魂―新訳紅桜編―を見ました。
余韻に浸りたいです（笑）

* 0 1 3 * 無言

万事屋 + α は、配達を再開した。

だが、銀時とラグは無言だった。

「……」

「ちょっと、銀さんもラグ君もさっきから黙ってたままで…どうかしたんですか？」

新八は聞いた。

「るっせーな。頭ん中で先月号のジャンプを振り返ってたんだよ。ギンタマンもう打ち切られたかな？一護死神復活したな、とか」

「アンタの頭は本当にジャンプと甘味のことしかねーのかよ」

「ったくよー、めんどくせーっての」

銀時は鼻をほじった。

口から出た錆などではない。めんどくさいなんてこれっぽっちも思っていない。

「……」

ラグは無言のままだった。

「ラグ、どこか痛いのか？ニッチがなめるか？」

ニッチは心配そうに覗き込む。

「大丈夫だよ、ニッチ」

『これで…最後の配達かもな…』

「……」

——*—*—*

ジヨルジユの小さな村

「今日はウェラー牧師の教会で寝泊まりさせてもらいます」

「野宿よりはマシアル」

「ありがたく思えよ！」

新八はつつこむ。

「こんばんは！ウェラー牧師！」

扉を開けたのはウェラー牧師だった。

「やあ！よく来たね」

優しいおじいさんという感じた。

銀時たちも頭を下げる。

ウェラー牧師はにこやかに言った。

「ゆっくり休んで行きなさい」

中は暖炉があり、温かった。新八と神楽、ニッチは暖炉の側に寄り、手を温めていた。

ラグも側で地図を広げ、ルートの確認をした。

銀時はウェラー牧師に会釈した。

「アナタも、テガミバチなんですか？」

ウェラー牧師は銀時に尋ねた。

「いやいや、そんな立派なモンじゃないんでね」

「では…」

「遠い星から、BEEの配達の依頼を受けてね」

銀時はラグたちを眺めた。

「…アンバーグラウンド国民ではないんですか」

ウェラー牧師は目を大きく開いた。

「…驚いたぜ。太陽がないからって作っちゃうし…あんなチビたちが鎧虫を退治したり…」

「ここでは当たり前なんです」

そう言ったウェラー牧師の表情は、どこか悲しげだった。

「…ここをなくすって、どうことなんですか」

銀時は切り出した。

ずっと不思議に思っていたことだ。

「鎧虫に食べられてしまうんだ。あと一つは…ゴーシュ・スエードという人をご存じですか？」

「はい…」

「ゴーシュの場合は、自分のところを全て心弾に撃ち尽くしてしまったのです」

なるほどな、と理解した。

「命は…こころあつての代物ですからね」

難しいことは考えなくなかった。ただ、届けるだけのテガミバチが…ラグが…こんな危険と隣り合わせだなんて。

* 0 1 3 * 無言（後書き）

新…：なんか、驚きです。こんな真面目な銀さん…。

神…：違うネ、新八。奴はただ単に格好付けただけアル！地球に帰ったらまたプー太郎に戻るネ。

新…：やっぱ…：そうなのかな。

神…：もう少し奴を泳がせとくアル。

*** 0 1 4 *** 夢の中で（前書き）

この話は銀時が語り手です。

* 014 * 夢の中で

——*—*—*

こっア…

俺は今どこにいんだ…

なんか懐かしいな。

「おいっ！銀時！貴様はいつまで寝ていれば気が棲むのだ！！」

いるハズもねエツラの声がする…

「ツラあ、そんなんじゃコイツは起きねーぜ。こっしねーと」

アレ？高杉の声がする。なんでだ？てか、こっするって何？

パアアアアン

「いでエ！！何すんだコノヤロー！ってアレ？」

俺はいつの間にか自分の部屋で寝ていた。

「新八は？神楽は？…ラゲは」

「何を言っておるのだ銀時。そんな人はどこにもおらん」

ヅラは腕組みをして、俺に言いかけた。

何言っただよ。

「変な夢でも見てたんじゃねーの？」

てか、なんで高杉がいるの？

「早く着替えんか。今日は武州から先生が来られるのだぞ」

「先生…？」

先生って…まさか…

「松…陽…先生か？」

「当たり前ーだ」

何言っ てんだよ。

松陽先生は…あの日…

生きてるハズがない。

「冗談だろ？だって松陽先生はあの日、死んじまって…」

俺の手は汗でびっしょり濡れていた。

「お前、頭でも打ったか？」

「貴様は…」

嘘だろ？

ガラガラ

「いらしたみたいだ」

「オイ、ちよっ……」

嘘だろ？

足音が近づく。

体がチラッと見えた。

「松……陽……先生」

*** 015* 届くのは手紙だけじゃない(前書き)**

戻りまーす

* 015 * 届くのは手紙だけじゃない

* — * — * — * —

「松陽先生！」

ガバッ

目を覚ますと、薄暗い天井が見え暖炉の火のバチバチツとする音が聞こえた。

横には神楽とラグが寝ていた。

「夢…か」

ホッとしたようにまた寝転んだ。

「チツ、嫌な夢…見ちまつたぜ」

再び目を閉じたが、どうもそういう気にはなれなかった。
銀時は着流しを着て、外にでた。人工太陽が遠くの方で瞬いている。

『大切な人に、手紙を書いたことはありますか？』

ラグの言葉が、ふと蘇った。

「わりーな。どうにも俺アしみつたれた手紙なんて書くタマじゃねーんだ。松陽先生。アンタは…毎日コソコソなんか書いてたけど…」

人工太陽に向かってぼやいた。

「ずいぶんと遠くに行っちまって。俺アアンタに出せねーや…。うまい言葉なんて、これっぽっちも思い浮かばねエ。感謝の言葉も…ロクに出ねエや…」

銀時はフツと笑った。

「でも…コレだけは言える。…俺の魂はアンタにきつと届くってな」

そう言うと、銀時は教会へ戻った。

「なんて恥ずかしいことやってんだ俺ア…」

ま、でも…。ラグに会わなかったらこんな気持ちにはなれなかったのかもな…と思った。

部屋に入ると、みんな起きていた。

ラグは銀時に向かって笑った。

新八も。

神楽も。

ニツチも。

「又ニニイ…」

ステーキも。

「さア…出発しますか！」

*016*ダコワーズ断崖

「なんか…だんだん険しくなってきたネ」

神楽が言った。

そっいえば…。岩が所々転がっている。

「まっ、こっいつのは任しとくアル」

神楽はひょいっと岩を持ち上げた。流石夜兎の力。

神楽のお陰で、行きやすい道になった。

「ダコワーズ断崖は危険だから、気をつけてください！いつ鎧虫が現れるか分かりませんから！」

「オメーに言われんでも分かってるわ」

「確か…ダーウィンが旧トンネルがあるって…どこだっけな」

ダーウィンとは、配達中にこのダコワーズ断崖で命を落としたデガミバチ、エレナ・ブランのディンゴである。

「それにしても…こんな光景があるなんて…」

新八は息をのんだ。黒くて大きな物に、飲み込まれそうだった。

「オラああああ！…出てこいや鎧虫うう！…」

「出てこねーとどうなるか覚えとけや！…」

銀時と神楽は叫んでいた。

「アレ、出てこないならどうなるネ」

「出てこねーならオメー、アレだろ。俺たちは安全ってことだよ」

「あ、そっか」

「オラああああ！！鎧虫うう！！出て来んなアアア！！」

「出てきたらどうなるか覚えとけや！！」

「さっきから何言ってたんだアンタら！！場を見極めろ！場を！！」

「威嚇に決まってるだろーが」

「バカだろ」新八は呆れた様子で言った。

「皆さん！この辺は鎧虫のテリトリーなので、注意してください！」

「わーってるよ！独断専行なんざしねーよ！！」

その時、神樂が何かを見つけた。

「セイウチみたいな崖アル」

その崖は神樂の言うとおり、セイウチの形をした崖であった。

「アレは…セイウチ崖だよ。その名の通り」

ふーん、と神樂はぼやいた。

一行は旧トンネルへ向かった。

ゴオオオオ

何かの気配がした。

***017* 堅忍不拔（前書き）**

ラ：ぼくたちの活躍も、もう17話も行きましたよ！！

ニ：ラグよ。それはすごいことなのか？

ラ：そうだよ、ニッチ。

ニ：ニッチのデカパンもすごいことになったぞ！

ラ：え…？それってどういう…。！！！？

* 017 * 堅忍不拔

ドゴオオオオ

断崖の上から鎧虫、アブサンが姿を現した。

「鎧虫…！」

皆は固唾を呑んだ。

「おめーら！いくぞ…！！！」

「「おおおおお…！！」」

襲いかかってくるアブサンに、万事屋は負けじと対抗する。

少しでも、ラグが心弾を撃ちやすいように。

ジャキイイン

銀時の鎬が、鎧虫の鎧と削り合う鈍い音がした。

「へっ、やっぱり鎧で造った刀はすげーや。何でも斬れそうだぜ」

ドゴオオオオ

「「「「「！！！！！！」」」」」

なんとそこにはもう一体、鎧虫アブサンがいた。

下の断崖から跳ねてきたのだ。

シュルルッ

触手の伸びる音は、ラグに近づく。このままではラグが危ない！

ザッ

「…銀さん！」

銀時はラグの一步手前のところで触手を斬った。

「早く撃たねーと、ヤバいぞ！」

「…はい！」

ラグは弱点の隙間を探した。

みんな必死で戦っている。

早く…

隙間を…

「あつた！」

「気張れエエエエ！！」

「うおおおおお！！」

銀時が叫んだ。
それに応じてみんなも声を張る。

ドクン

ドクン

心弾が装填され、琥珀と共鳴する音が鳴り響く。

「心弾装填…」

撃ち出す弾はこころのかけら…!!

「赤針!!」

ドオオオオオ

赤針がアブサンの隙間を狙う。

ガッシャアアアン

見事、命中。

無惨にもアブサンは碎け散った。

だが安心するのはまだ早い。

もう一体のアブサンが、ここに反応してラグに襲いかかってくる。

「ラグ……!!」

* 017 * 堅忍不拔（後書き）

ラ：ニ、ニニニニツチ！？何そのパンツ…ぼくのじゃないよね？

神：それは私のパンツネ！はかせたアル！

銀：女の子がトランクスはくなんて言語道断！！よい子のみんなが真似するでしょーが！いいかニツチ。世の中にはな、怖いおじさんが一杯いるんだよ。だからちゃんとしたパンツはいとかねーと、いざ襲われた時とかにドン引きされたらどーすんだ！！

新：アンタ何めちゃくちなこと言ってますか！！アンタが怖いおじさんだよ！！

ニ：でも股がぴってなって落ち着かない。

*** 018 * 取り巻く触手と力**

「ラグ……!!」

銀時が叫んだ時にはもう遅かった。

ラグはアブサンの触手に巻き取られてしまったのだ。

「とりゃアアアア!!」

銀時は触手の上に飛び乗った。だが触手は、銀時を除けようとする。必死の抵抗で、銀時は触手にしがみついている。

「コイツを離せ!!ぬごおおおお!!」

歯を食いしばり、ラグに絡み付いている触手を除けようとする。だが、なかなか固くて動かない。

「ちくしょう、微動だにしねエ」

アブサンも、ラグのこころ欲しさに何本ものの触手をラグに巻きつける。

「ほあたアアアア!!」

神楽の一撃で、一瞬アブサンの体が揺れた。その拍子にラグの心弾銃が落ちた。

ラグは触手の中で意識を失っている。

「…このままじゃラグのこころが食われちゃう…」

銀時はラグから離れ、アブサンの隙間へ走った。

「新八!! 神楽!! ニツチ!!」

そう叫び、4人はアブサンの隙間がある腹部へ走った。

一か八か…

「いくぜエエエー!!」

その合図で4人は一斉に隙間へ跳ねた。

そして、隙間から頭に向けて斬った。

ギィィィィ

アブサンは鳴き声を上げた。混乱しているアブサンはラグを離してしまった。

「やった!」

「いや、感心してる場合じゃないですよ!あのままじゃラグ君落ちます!」

ラグは宙に舞っていた。

あっ、そうか。と銀時と神楽は納得していた…

「とか言ってる場合じゃねエエエエ!」

「うおおおおおおおおお!」

銀時は猛スピードでラグの落下地点まで走る。

走る走る走る走る。

間に合ってくれ…

手を伸ばす

ギリギリ…

「銀ちゃん、歯食いしばるネ」

スローモーションで神楽は傘をバットの持ち方にした。

「え…?」

そしてスウィング!!

思いつ切り銀時のケツに当たった。

その時には神楽は片腕でラグをキャッチしていた。

「ホームラン!!」

銀時は空へ消えた。

ここでいう、キラーンである。

「ええええええ!!!!?」

「銀ちゃん、さよーならー!」

「ええええええ!!!!?」

ラグは気を失ってるし、銀時は空へ消えた。

「どうすればいいんだよオオオオ!!」

「湿った空気は銀魂に合わないアル」

そついう問題じゃないでしょ神楽ちゃん!!?」

*** 018 * 取り巻く触手と力（後書き）**

大丈夫です。

次から真面目です。

* 019 * 心弾銃

「いっただだっ、何すんだコノヤロー!!」

銀時はどこからか帰ってきた。

「銀ちゃん生きてたアルか。チビ助も気を失ってるけどなんとかキヤツチしたネ。終わりよければ全てよしアル」

「ホントお後がよろしいようで、じゃねエよ!」

「ノったアル」

「もうノりませんよーだ」

「言ってる場合か!! まだ一体鎧虫いるんですよ!」

新八が焦ったように言う。やはりあの一撃では鎧虫には効かない。心弾を撃たなければ。

「ラグが起きねーと鎧虫は倒せねエんだよな。まいったな…」

時間を稼ごうにも、皆体力はかなり消耗している。

どうすりゃいいんだ…

銀時は固唾を呑む。

その時、あるものが目に止まった。

ラグの心弾銃、ノクターンである。

それを拾った。

急いでラグのもとへ駆け寄る。

「オイ！ラグ！！しっかりしろ、ラグ！！」

返事がない。

鎧虫を倒さないといけない……。。

「お前！それはラグの心弾銃！！どうする気だ！」

ニツチは言った。

「…やってみねーと、分かんねーだろ？」

「撃つのか？」

「時間を稼いでくれ」

ガシャコン

銀時は心弾銃に、ラグのポケットに入っていた弾を入れた。

ラグは相変わらず気を失っている。

「確か…ラグはこの目を使ってたな」

ラグの左目には精霊琥珀がはめ込まれている。

心弾を撃つには、精霊琥珀を共鳴させ銃の弾の威力を上げないといけないのだ。

心弾が撃てるようになるのは個性だ。一週間かかったりするケースもある。

コツは分からない。

やるしかない！

銀時はラグの胸に手を載せた。

* 019 * 心弾銃（後書き）

銀：おまつ、コレ、テガミバチ11巻のパクリじゃねーかアアアア
！！！！

神：二度あることは三度ある言うアル

銀：なくていいわ！！読者の皆様もアレ？このシーンどつかでやってたよな？って混乱招くよ！？アレ？結局フリーターは家を買えたんだっけ？的な！！

神：どーでもいいアル。奴は松ケンと駅のホームに酔った勢いで飛び降りて、電車にひかれそうになったらでっかい金玉のある部屋にいてその金玉を金に換えて家を買ったんでしょ？

銀：ちげーよ！！ガン。はこんな話じゃないわア！二宮君は好青年だからちゃんと稼いだ金で家を買ったんですう！

新：なんの話してんだアアアア！！謝れ！とにかく二宮ファンと松ケンファンとテガミバチファンの皆様に謝れ！！

銀：…すいませんでしたア。いや、あの僕自身もそんなに悪気はなかったんでエ。

神：つーわけで！みんなでガン。見に行くアル！！

新：反省する気ねーのかよ！！

*** 0 2 0 *** 撃ち出す弾は魂のかげら

銀時はラグの胸に手を当てた。

ゆっくりと目を閉じて、神経を統一させる。

すると、ラグの体が光ってきた。左目の精霊琥珀が赤く光る。

ドクン

ドクン

「…すげエ…」

「装填された！撃て！！」

ニツチが叫んだ。

「銀さーんんん!!」

「銀ちゃーんんん!!」

新八と神楽も叫ぶ。

「うおおオオオ!!」

右手に心弾銃を持ち、銀時は隙間のある腹部へ走った。

「撃ち出す弾は魂のかけら…」

ドクン

ドクン

「ん…」

「気づいたか？」

少し間を開けて言った。

「銀さんが…ぼくの心弾を…？」

「ああ、撃った…」

ラグは泣いてしまった。

「あっありがどう…ごさいます…あっ、ありっ」

「もういいって。泣くな」

「うっ、うえっ」

* 021 * 白夜叉

ダコワーズ断崖を抜け、ようやく穏やかな道に出た。

だが、ラグの様子が変だった。さっきから一言も喋らない。話しかけても、頷いたり相打ちしたりするだけだ。そのラグの目は、何か恐ろしいものを見ているようだった。

「さっきからしらけた面しやがって、どうした？」

「あ…」

ラグは倒れてしまった。

「ラグ！オイ、ラグ！！」

——*—*—*

なんでこんなに真っ暗なんだろう……。
言い知れぬ不安がこみ上げる。

あちこちで煙が上がっている。

ぼくは何を見ているんだろうか……。

みんな血だらけだし、倒れている人もたくさんいる。

雨も降っている。

コレは……

銀さんの記憶……？

雨の降る中、白い、亡霊みたいな人影があつた。

銀さんだ……

どうしてこんなところに立っているの？

その景色は一瞬にして変わり、違う景色に変わった。

「なアツラ。俺たちは…これでいいのか？」

「ヅラじゃない、桂だ。……お前の言っていることは、戦に終止符を打ちたいとのことだな」

髪の高い人は、腕を組んでいる。

「もう…俺ア…わかんねーよ」

「銀時」

「めんどくせーよ」

また景色が変わった。

「ハア、ハア、そうか…お前…あの時の」

左目に大量の血を流している人が、網笠を被っている人に刀を向けていた。

ガキイイイイン

銀さん!!

「こいつア、俺が…!」

何が起きているのか、ぼくには全く分からない。

また景色が変わった。

「俺ア…もう仲間なんざいらねエ。持ったところでなんになんだよ」

銀さんは、屋根の上で誰かと喋っているように独り言を言っていた。

「そっちに行きてエ……松陽先生……」

そのまま銀さんは眠ってしまった。

そうか…

さっき銀さんはぼくの目の精霊琥珀を使って心弾を撃ったから……

これは銀さんの……

* 021 * 白夜叉（後書き）

銀………

ラ………

銀………人の記憶見て、面白いか？（怒）

ラ………、そんなことないです！（泣）

銀………カンニング行為と見なす。廊下に立ってなさい！（怒）

ラ………ごめんなさい！！（泣）

022 大事なものは失ってから気づく

ドクン

ドクン

ぼくの鼓動は高鳴っている。

銀さんは……大切な人を失ってしまったんだ。

また景色が変わった。

空が水色に明るい。雲が綿のように白い。

「おんしがおりゃ面白い漁になると思ってたんだがの〜」

「ワリーな。こう見えて地球が好きなんでね」

「銀時、おんしはこれからどうするが？」

「俺ア地球でのんびり釣り糸でも垂らすさ。そんで落っこちてきた星をもっぺん宙にリリースよ」

銀さんは空を見上げていた。その顔は、さっき見た顔とは違い穏やかだった。

「待て！銀時！」

髪の長い人が、銀さん呼び止めた。

「なんだよ、ツラか」

「ツラじゃない桂だ！……貴様、逃げるのか？」

「逃げる？」

「とぼけても無駄だ。……銀時、お前と手を取り背中を預けた戦を捨てると言つのか！？」

「……いい加減にしろよ。もう俺ア仲間が死んでいくのは御免なんだよ」

「松陽先生を奪った幕府が憎くないのか！？」

「憎いさ。だがいつまでも憎んでたって、何が残るって言うんだよ。……こんなこと……松陽先生は望んでねエ」

銀さんはそう言うと、去っていつてしまった。

また景色が変わった。

ぼくは……

すごく悲しくなった。

『ラゲ!』

声がする。

この声は……

——*—*—*—

「ラグー!!」

「……銀さん？」

目の前には銀時がいたのだ。新八も神楽もニツチもステーキも心配そうにラグを覗き込む。

「……すみません。大丈夫です」

ラグは上半身を起こした。

「どうしたんだよ。いきなり倒れるなんて」

「あ……」

ラグはいきなり銀時に抱きつき、泣き始めた。

「うわああああん」

銀時の記憶を見て、今まで感じたことのない感情に耐えきれなかったのだ。そして銀時の強い精神にも……。

「怖い夢でも見たのかよ……」

銀時はホッとしたように言った。

「銀さん、うえっ、うわああああん」ラグは銀時にしがみついたまま声を上げて泣いている。

「チビ助、お前は1日に1リットルは涙流してるアルな」

「どうしたんでしょうね……」

「けっ、迷惑なだけだ」

銀時は頭を掻いた。だがそう言いつつも、ラグに胸を貸すのであった。

*** 0 2 2 * 大事なものは失ってから気づく（後書き）**

神：オイ、チビ助。お前なんでそんなに泣き虫アルか？

ラ：なんでだろう…

銀：絶対5回は泣いてるよな。…もしかして俺のせい？

ラ：そんなこと！…あるような…

神：銀ちゃん、あんまチビ助泣かすなヨ。浅田が泣いてるネ。

023 護れなかったモノ

しばらく一行は歩き続けた。

「ああああああ!!」

いきなり銀時が叫んだ。

「ちょ、なんですか!?! 銀さん!!」

新八は驚いた。

「ヤバイよな。マジヤバイよな、うん、ヤバイ! ヤバイよヤバイよ
オオオオ!!」

「だから何が!?!」

「∴”美しい隣人”録画予約すんの忘れてた」

銀時は頭を抱えて言った。

なんだ、そんなこと。と新八は呆れた。

「マジ好きなんだよ!あの仲間由紀恵の不気味な笑顔がさア、もう
たまなくてさア」

「うるせーよ!!」

「いいじゃんかよ、エロおやじのかわいい妄想くらい付き合えよ。
なア？ラグ」

「えっ!？」

ラグはぼーっとしていたようだ。

「聞いてなかったのかよ、ったく、どいつもコイツも冴えない野郎
だぜ」

「あの…銀さん」

ラグは足を止めた。

何か言いづらそうだった。

「なんだよ」

めんどくさそうに返す。

「銀さん…ぼくの目を使って心弾を撃ったんですね。だから……
見たんです。銀さんの記憶を………」

一瞬、銀時は目を見開いた。だがすぐに冷静に戻る。

「そーかい」

そう吐き捨てると、歩き出した。

意外にあっさりすぎて、ラグは困った。

「責めるつもりはねーよ。見ちまったモンは仕方ねエ。だがな、これだけは言っておく」

銀時はラグの方を見た。

「……俺みたいになるなよ」

その顔は、悲しそうだった。

ラグは返す言葉もない。

一筋の涙が伝った。

*** 0 2 3 * 護れなかったモノ（後書き）**

銀：短ーよ！！ふざけんなアアアア！！

* 024 * 帰館

ハチノス

配達を終え、一行は帰館したのだ。

「いやいや！ご苦労様でした！！」

ロイドは相変わらずにここにこしていた。

「ありがとう、万事屋さん。あなたたちの依頼は終了だ。コレはお約束のものだよ。ちゃんと換金できるからね」

札束が入った封筒を銀時に渡した。

「やっと地球に帰れるよオ。疲れたな」

銀時は背伸びした。

3人はハチノスをあとにした。

「そっぴや、チビ助の姿がないネ」

「オイオイ、散々手伝わせておきながら見送りもねーだア？何様だよ、ったく」

「まアまア。きつと次の配達に出ちゃってるかもしれないし」

次の配達…か。銀時は呟いた。

「わりイ、ちよつと待つてろ」

銀時は新八たちのいる場から離れ、走った。

「ハア、ハア、…あ」

しばらく走り、ユウサリから少し出た岩道の所にラグは座っていた。

「お前……こんなところで何やってんだよ」

銀時は話しかけた。

「銀さん…！」

そう言うと、ラグは銀時に抱きついた。

「…さよならは…嫌なんです……」

銀時はラグを突き放した。そして頭を撫でた。

「最後の仕事だ。案内してくれ」

「え……」

銀時は立ち上がった。

何故だろう。配達ではないはずなのに……。

銀時の目は、真っ直ぐだった。今までにない真剣さを感じる。

「俺も、お前がどんな過去を辿ってきたか知っている。だから…なんとなく気持ちは分かる。テガミバチの仕事を誇りに思っていることも。…だがお前は迷いがある」

「迷い？」

「俺は…本当のお前の気持ちを知っていてエ。だから」

ラグは息を呑んだ。

「案内してくれ。リバーズの拠点へ…！」

*** 0 2 4 * 帰館（後書き）**

シリアス銀さん次話から活躍！お見逃しなく！！

*025*リバーズ（前書き）

銀：オイオイ、作者のヤロー学校から投稿だってよ。真面目に授業受けるやコノヤロー

神：マジアルか。そんな奴、とつと先公に携帯見つかって没収されればいいアル。

銀：だよなー。俺だって授業中は携帯なんかいじらなかつたぜ？寝てただけだしよー。

新：寝てるも同じでしょーが！

銀：子供がまだ食べてるでしょーが！

新：…？

* 025 * リバース

「案内してくれ。リバースの拠点へ…！」

「リバース！？…ダメです！あそこは…」

焦るラグ。

「お前は迷っている。あんなに憧れていたゴーシュが、テガミバチを誇りに思っていたゴーシュが、リバースに肩入れしていることだよ」

「それは…」

ラグは返事に詰まった。確かに、リバースの事について色々知っているし、リバースの活動も……。

「行って…どうするんですか？」

「俺は何もしねえよ。…お前の答えを聞くだけだ。テガミバチとして」

「テガミバチ…として」

ラグは固唾を呑んだ。

テガミバチとして、リバースを止める。

ラグはリバースに関して知っていることを銀時に全て話した。他言はなし、とも約束した。

銀さんと一仕事。

最後の。

「リバースの拠点と言えばロレンス…。多分町外れの教会にいるはず…」

ラグは呟いた。

「…どうしてリバースの拠点へ行こうと思ったんですか？」

「あー？」

銀時はだるそうに言った。

「さっきも言ったとおり、お前の答えが聞きたいのと…」

「と？」

ラグが問いかけても銀時は何も答えなかった。

しばらく歩くと古びた教会が見えた。ここに、リバーズの拠点、ロレンスがいるはずだ。

2人は中へ入って行った。

銀時は黒ずくめの格好に変装していた。ラグを人質に取り、ロレンスへの直接接触に移るための作戦である。

カッーン

カッーン

誰かがこちらへ近づいてくる音がした。

黒いハット帽を被り杖をついているロレンスが現れたのだ。

「誰か…いるのか？」

ロレンスはテガミバチと背の高い黒ずくめの男を見た。

「ノワールか？」

スカーフを深くかぶり、顔は分からなかったが銀色の髪の毛がちらっと見えたのだ。

「お前はラグ・シーイング……」

ラグは銀時の一步前に出た。そして心弾銃をロレンスに向けた。

「ノワール！このテガミバチを始末しろ」

と命令したが、そこにいるのはノワールではない。

銀時はクククツと笑った。

「ノワール？誰が？」

銀時はスカーフを捲った。

「誰だ！？」

ロレンスは後退りした。

「誰だチミはってか？そうです私がジャパニーズヒーローです」

*025*リバース(後書き)

授業って言っても、自習ですることがなかったんで！

神：言い訳すんなヨ。もうすぐ学年末でしょ？

グサッ

銀：いい加減携帯止めろよな。こっちも1日に2話とか3話とかポイポイ投稿されて疲れてんだよ！

グサッ

新：まアまア。……勉強しろよな。

グサッ

ナーム

* 026 * 迷い

「何だチミはってか？そうです私がジャパニーズヒーローです」

銀時は黒いスカーフを取った。

「何戯言を言っている」

銀時はにやつと笑った。

「俺はテガミバチでもリバースの一員でもねエ。ただし、少なくともリバースの味方じゃねーことは覚えとくんだな」

「ならば部外者の貴様には関係ないだろう」

ロレンスは不気味に笑う。

「うざったい長髪しやがって。ツラか？」

「ツラじゃない」

さすがに”桂だ！”までは言わないか。

「市井の手紙食いモンにしてその上人々の命簡単に鎧虫の犠牲にしやがって。そんな輩がリバースだなんだのほざいてんじゃねーよ」

銀時のその目は、鋭く真っ直ぐだった。

「…ラグ・シーイング。君は迷っている。ゴーシュ・スエードが敵であることに…」

心弾銃を持つラグの手は小刻みに震えていた。

「ラグ！アイツの言うことなんか鵜呑みにすんな！！」

ラグは唾を呑んだ。

ノワールの記憶を見てしまった今、自分のなかでリバーズを肯定化させているのかもしれない。
でもテガミバチである以上、リバーズは敵だ。

葛藤が繰り広げられる。

「フッフ、やはり迷っているようだな。…ではその鞆の中の手紙を渡し、君と隣の部外者の命でも剥奪しようか」

「オイオイ、さっきから部外者って酷くねーか？せめて侍って呼んでくれよ。サムライイ」

「侍？」

ロレンスはああ、と何か思い出すような顔をした。

「…噂の侍ね。ノワールから聞いたよ。妙に剣の腕がたつ輩がテガミバチと一緒にいると」

ロレンスは銀時を全身嘗めるかのように眺めた。

「オイ、ラグしっかりしろ」

「すみません…」

ラグは汗だくだった。

「君は、迷っている。…フッフ」

ロレンスは振り返り、暗闇に消えていこうとしていた。

「ぼくはテガミバチだ。誰がなんと言おうと、人々の思いが詰まった手紙を届けるテガミバチだ」

ラグは銀時の方を見た。

「だってよ。侍は剣、テガミバチは届けることだ。ゴージュは敵じゃねエ。な、そうだろ？」

ラグは頷いた。

ゴーシュは敵じゃない。そう決心が付いたことに安心した。

「ゴーシュは敵じゃない。でも…ノワールは味方じゃない！」

ラグの心弾銃が精霊琥珀と共鳴し、光っていた。

*** 027 * 決断**

ラグの心弾銃が精霊琥珀と共鳴し、光っている。

そのままロレンスに向ける。

「撃つのか？」

ロレンスは逃げようとはしなかった。

「心弾装填……」

ロレンスにありったけのテガミバチの思いを……

ゴシュー……

ザジ……

コナー……

ジギーさん……

ラグの撃った赤針はロレンスの胸へ貫いた。

ロレンスはよろめいただけだった。

そして、たくさんの映像が浮かんた。
憧れのテガミバチ、ゴージュとの思い出…今まで会ってきた人々…
すべての配達の記憶…。

ロレンスは頭を抱えていた。そしておかしな声を上げた。

「くくくつ…はっ、はっ、あははははは！！」

ロレンスはこちらを睨んだ。

「…何がテガミバチだ！何がこころだ！いらぬ。私にはこころな
んていらぬ。何故なら全て政府にこころをとられてしまったから
！我々リバーにこころなんていらぬ！！そんなもの見せられて
も私の意志は揺らがない！」

ロレンスは再び闇へ戻ろうとするが、ラグが呼び止める。

「ぼくは必ずリバーを止める！ゴージュのこころを元に戻す！！
お前たちのやってることは間違ってる！！」

ロレンスは振り返った。

「くくく、また会おう。…ラグ・シーイング」

そう言つと、暗闇に消えていった。

銀時はラグの頭に手を載せた。

「銀さん……」

「お前の答えが聞けてよかったぜ。…お前が強い魂を持っていることも」

「魂……？」

ラグは首を傾げた。

「おうよ。こころって奴だよ」

銀時は微笑した。

コレで……よかつたんだよな……。

銀時は教会の窓から見える星空を眺めた。

星が

瞬いている……。

*** 0 2 8 * 書きたいこと (前書き)**

かなり短くなっております!!

*** 0 2 8 * 書きたいこと**

「銀さん！どこ行ってたんですか！？」

「待ってる言うからずっと待ちぼうけくらったネ！」

ハチノスで新八と神楽は待っていた。

「ワリーな、ちよいと野暮用でな」

「もう宇宙船来てるんですから！行きますよ！！」

「そうだな……」

「あれ、チビ助は？一緒じゃないアルか？」

「アイツは…大丈夫だ」

銀時は歩き出した。
ラグはもう大丈夫。
迷いなんてない。

——*—*—*

「銀さんたちが地球へ帰ったら……必ず手紙書きますから！」

「楽しみにしとく」

ラグは銀時の手を握った。

「ぼく…忘れませんか。銀さんたちと一緒に旅をしたこと」

銀時は薄く笑った。

「また…いつか会おうや」

「…はい!」

——*—*—*

さようなら

*** 028 * 書きたいこと（後書き）**

次回から最終章突入ですね！アレ、やっと？って思いますがやっとです！

* 029 * 伝えたい言葉

「館長……」

「なんだい？アリア君」

万事屋がいなくなり、いつもと変わらないハチノスは穏やかさを取り戻していた。

でも、この静けさも妙に落ち着かなくなる。

「あの3人…帰っちゃいましたね」

「寂しいのかい？」

「いっいえ！私は…それよりラグです」

ロイドはフツと笑った。

「…彼が言ってたんだけどね、ラグは大丈夫だって」

彼とは、彼である。

「いつも通り、元気に配達しているさ」

ロイドは窓から見える星を眺めた。

拝啓 万事屋さん

あの日からちょうど一週間が経ちました。

みなさんはお変わりないですか？ぼくはテガミバチとして、毎日人々にこころを届けています。

鎧虫を倒したりするのは相変わらず大変ですが、頑張っています。

いつも星を眺める度に万事屋のみなさんを思い出します。

この星たちのどれかに、銀さんたちが住んでるんだなあと考えてしまいます。

いつか…きっと会える日が来ることを願っています。

会って、色々話したいことがいっぱいあります。

銀さん、新八さん、神楽ちゃん…

ありがとう。

配達ご苦労様です。

ラグ・シーイング

*** 029 * 伝えたい言葉（後書き）**

もうすぐクライマックスですね。長かった…

*** 030 * 君へ届けに行くよ (前書き)**

今回で最終回です。

たくさんのアクセス、ありがとうございました!!

* 030 * 君へ届けに行くよ

あれから一週間が経ちましたね。万事屋も元気にやっています。と言っても、ほとんどぐーたらな生活を送っているんですが…。

先日、ラグ君が手紙を送ってくれた時、みんなで手紙読もうってなっただけど銀さんだけは読んでいなかったんだよね。

でも…絶対読んでいると思います。

あの人、照れ屋だから。

それでは今日はこの辺で。

また会う日まで。

志村新八

「何辛気くさいこと書いてるアルか」

「神楽ちゃん！辛気くさいって…」

神楽は新八の書いた手紙を横から覗いていた。

「…チビ助共、元気にしてるアルか？」

「うん…きつと今頃配達してるんじゃないかな」

神楽は窓の青空を見た。

「おーい、夕飯の材料買ってきたぞ」

「あつ銀さん帰ってきた」

玄関の方から声がした。

「今日の夕飯は焼き肉アルか！？」

「バーカ、んな一家破綻するような物食える金、ウチにはねーよ。
銀さんお手製シティカレーだ」

「カレーアルか！」

神楽は嬉しそうだった。

いつもと変わらない万事屋、いつもの日常茶飯事。

今が一番幸せ。

ラグ…

いつまでもメソメソ泣いてんじゃねーぞ。

なんかあつたら

また行ってもいいけどよ。

遠慮なんかすんなよ。

俺たちはダチ公だ。

ラグは目を掠めた。

最後にしっかりとした字で書いてある名前の部分に涙を一滴、二滴、こぼれ落ちた。

” 万事屋より ”

それしか書いてなかったけど、ラグには分かっていた。
この手紙を書いたのは銀さんであることを…。

力強い達筆…不器用な言い方…。

「うっ…うっ」

『泣くなよ、男だろ？いつまでもメソメソ泣いてっつと、悲しい気持ち
ちが倍になるぞ』

「がなじいんじゃないんですぅ…うれじいんですぅ…！」

ラグは大粒の涙を零した。

涙を拭いて、アカツキを照らす人工太陽をみた。

*031*この宇宙で繋がっている

こんにちは！

『テガミ魂』作者の優女と申します。

この度は、『テガミ魂』を最後まで読んで頂き、誠にありがとうございます。

この話は私の好きな『銀魂』と『テガミバチ』を掛け合わせたものだったんですけど…いかがでしたか？

どんな言葉でも結構です。感想を頂けたら幸いです。

さて、この物語を作っていく中で悩んだことはたくさんありました。どうやって、二つの作品の味を出せるか…それが一番の壁でした。銀魂らしい部分もあればテガミバチの部分も欲しい…正反対の主人公二人をどういかせようか…。深く追求せずと言っても浅くはない、キャラ的な趣旨はこんな感じです。

あとテガミバチは心弾を使って人の記憶が見れますから、それも活用しました。

銀さんの過去回想シーンですね。個人的に回想シーンを書くのは好きなんです…銀さんの過去を考えるのは悩みました。色々な諸説がある中で最もな話を選び、結構深い話にしようと思ったんですが意外にあっさりしてしまいました。

まア…でも真実は本編で！！の方がいいかな、と思います。

さて、私優女の作品は『テガミ魂』だけではございません！…すみません宣伝になってしまいましたが…

『KAMUI』という話を書かせて頂いています。

神威視点の話ですが…たまにシリ阿斯、な感じですね。そちらの方も時間が良ければ宜しくお願いいたします。

最後になりますが、本当にありがとうございました！たくさんの方がアクセスして頂いてもらって、嬉しい限りです。

それでは（*^^*）

*031*この宇宙で繋がっている（後書き）

ラ：みなさん、お疲れ様でした！

銀：本当に疲れたぜ。鎧虫退治に鎧虫退治。本当疲れた。

新：鎧虫退治しかねーじゃん！！

銀：そーだよ。ヒーローは何かを退治するのが基本の勤めだろーが。

神：ただたんにでしゃばっただけアルヨ。私たちはそんな汚い大人をずっと見てただけネ。

新：シャラップ！！そんなこと言う奴いるか！

ラ：…もしかして銀さん…「俺みたいになるなよ」ってセリフの意味…

銀：ドントウオーリー！！心配いらなーい！！大人を信じて！！俺そついう意味で言ったんじゃないんだって！！！！！！

* 0 3 2 * テガミ魂

ラグは人工太陽を眺めていた。明るくて美しいがどこか儚い。

人々にとっての希望ととらえるか、憎しみととらえるか…。わからない。そのわからないことが怖い、知ってしまったら？と思うと知らない方が幸せなのかもしれない。

ぐしゃぐしゃになってしまった銀時からの手紙。ずっとポケットに入れていたからである。

友達と言われたことが、どれだけ嬉しかったか…。

銀さん、会いたいよ。

また涙が零れる。

会いたい

会いたい

会いたい

ただ、アナタに会いたい……。

それが叶わないのが辛くて悲しくなる。

会いたい

会いたい

「ラグ」

声がした。

ゆっくり振り返る。

懐かしくて

力強くて

不器用で

護ってくれる

テガミは魂^{こころ}…

ぼくは走る。

嬉しくて涙が溢れる。

そして抱きつくだろう。

そしてまた手紙を出すだろう。

テガミにだって、魂^{こころ}はあるんだよ。

ずっと。

人工太陽は、5人のシルエットを明るく照らしているのだった。

* E N D *

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3865q/>

テガミ魂

2011年3月6日00時23分発行